

〔研究ノート〕

『ベオウルフ』のグレンデル

佐藤 紀子

OE の英雄叙事詩 *Beowulf* は、写本（MS. British Library Cotton Vitellius A XV）が唯一残されている。1731 年に火災で損傷し、1753 年に British Museum に移管され、現在は British Library に保管されている。前半部は 12 世紀の半ばに筆写されたもので、後半部はおそらく 10 世紀終わり頃に二人の ‘scribe’（写字生）により書写されたものである。3182 行の長詩 *Beowulf* の作者は一体いつの時代のどこの誰なのか、不明で謎である。現在伝わる写本が数回にわたる筆写を経たものであるとすると、多くの口誦定型表現がみられるところから、何代かの複数の口誦詩人たちが作者なのか？しかし内容に大きな変更が加えられなかったとすると、一人の詩人の作品で、時代はいつなのか？これも、8 世紀初頭、9 世紀初頭、11 世紀初頭と諸説ある。しかし、詩の中の個性的語句、定型表現などの内的証拠、歴史的、文化的背景を考慮すると、およそ 8 世紀前半、あるいは後半の、Mercia か Northumbria の一人の詩人によるものと考えられる。

Hhæt! We Gardena in geardagum
Beodcyninga, þrym gefrunon,
hu ða æþelingas ellen fremedon.
Oft Scyld Scefing sceapena þreatum,
monegum mægþum meodosetla ofteah,
egsode eorlas. Syððan ærest wearð

feascraft funden, he þæs frofre gebad,
 weox under wolcnum, weorðmyndum þah,
 oðþæt him æghwylc þara ymbsittendra
 ofer hronrade hyran scolde,
 gomban gyldan. Þæt wæs god cyning!
 Ðæm eafera wæs æfter cenned,
 geong in geardum, þone god sende
 folce to frofre; fyrendearfe ongeat
 þe hie ær drugon aldor[le]ase
 lange hwille. Him þæs liffrea,
 wuldres wealdend, wolordare folgeaf;
 Beowulf wæs breme (blæd wide sprang),
 Scyldes eafera Scedelandum in.
 Swat sceal [geong g]luma gode gewyrcean,
 fromum feohgiftum on fæder [bea]rme,
 þæt hine on ylde eft gewunigen
 wilgesipas, þonne wig cume,
 leode gelæsten; lofdædum sceal
 in mægþa gehwære man geþeon. (ll. 1-25)¹

「おお、われらは、そのむかし、槍で名高いデネ〔デンマーク〕の王たちの、輝かしいおこないと、いかに、これら王君が武勇のわざをなしとげたかを伝え聞いてきた。

しばしば、シェビングのシュルドは、群なす敵たちから、あまたの人々から、酒宴の席を奪い取り、武勇者たちをおびえさせた。最初、彼〔の武威〕は微々たるものであったが、のちに、神の恩恵を受けて、天が下、その誉れが増し、ついに、四隣の人々はみんな、

1 *Beowulf* からの引用は、Elliot Van Kirk Dobbie ed. *Beowulf and Judith* (The Anglo-Saxon Poetic Records A Collective Edition IV) (New York: Columbia U P, 1953) による。

鯨の路（海）を越えて、彼に従い、貢物を献上しなければならなくなる。彼は、実に勇ましい王であった。それから、彼に一人の男子が、若君が、誕生した。それは、神が国民に慰めとして与えたものだった。神は、以前から長い間、国民の世継ぎのない苦しみを知っておられた。それ故に、生命の主、栄光の守護者は、彼にこの世の繁栄を与えたのである。ベオウルフは誉れ高く、その名は広くひびきわたり、シュルドの君は、シェデランド〔デンマークの国〕中に知られた。このように、若君は良き行いと、父君の財宝によって、将来何事をも成しとげることになるだろう。そうすれば、父君が老後になり、戦さをいどまれた時でも、部下の者たちが、彼の身を守って戦ってくれることになるだろう。すべての国民は、誉れなす行いにより、繁栄がもたらされることになるものだ。」（1-2）²

冒頭の‘Hwæt’（1. 1）は、他の多くの古英詩にもみられるように、ハーブの伴奏で叙事詩の吟唱を始めようとする‘scop’（吟唱詩人）が、聴衆の注意を喚起する時の間投詞である：

※ ‘interj. “what!” *lo!* (calls attention to a following statement)’³

※ ‘interj. (=inter. Pron.), *what, lo, behold, well;* by pers. or dem. pron.; at the beginning of the poem (as of many other OE. poems:1)’⁴

2 和訳は、大場啓蔵訳『新口語訳 ベオウルフ』（篠崎書林、1978）により、（ ）に頁数を記す。多数の和訳があるが、厨川文夫訳『ベオウルフ』一附「フィンズブルフの戦」（岩波書店、1941；復刊 1977）、長埜盛訳『ベオウルフ』一附フィンネスブルグ争乱断章」（吾妻書房、1967）、鈴木重威・鈴木もと子共訳『古代英詩 哀歌・ベオウルフ・宗教詩』（グローリア出版、1978）、羽染竹一編訳『古英詩大観』（原書房、1985）、忍足欣四郎訳『ベオウルフ』（岩波書店、1990）、小川和彦訳『ベオウルフ』（武蔵野書房、1993）と、現代英語訳、Edwin Morgan trans. *Beowulf: A Verse Translation into Modern English* (California, 1962) Kevin Crossley-Holland trans. *Beowulf* (London: 1968)、鈴木重威編『古代英詩 ベオウルフ』（研究社、1969）、Seamus Heaney trans. *Beowulf: A New Translation* (New York: Norton, 1999) を参照した。

3 J.R.Clark Hall ed. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* (Cambridge U P: Cambridge, Fourth Edition with a Supplement by Herbert D. Meritt, 1960; U of Toronto P: Toronto, Buffalo, London, (1960) 1996) の‘Hwæt’の項。Heaney は‘So’と訳している。

4 Fr. Klaeber ed. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, (Boston: D.C.Heath and Company, 1922; 3rd Edition with First and Second Supplements, 1950) ‘Glossary’

‘hronrade’ (l. 10) (鯨の路) は、‘kenning’ (代称) で、普通名詞の代りに描写的な婉曲法を用いる修辞法で (海) を表す。⁵

詩形で特徴的なのは、一行が ‘cæsura’ (中間休止) を境にして前半行と後半行に分かれること、原則、前半に 2 個、後半に 1 個の ‘alliteration’ (頭韻) をもつ音節を含むが、引用箇所にもみられるように、前半に 1 個の場合もかなりある。

「神が国民に慰めとして与えた若君」の Beowulf は主人公ではなく、フロスガール王の祖父にあたる。

Him ða Scyld gewat to gescæphwile
felahror feran on frean wære.
Hi hyne þa ætbæron to brimes faroðe,
swæse gesiþas, swa he selfa bæd,
þenden wordum weold wine Scyldinga;
leof landfruma lange ahte.
Þær æt hyðe stod hringedstefna,
isig ond utfus, æþelinges fær.
Aledon þa leofne þeoden,
beaga bryttan, on bearm scipes,
mærne be mæste. Þær wæs madma fela
of feorwegum, frætwa, gelæded;

5 「‘hronrade’ は「鯨の道」よりは、「鯨の泊まる場所」の意味であろう。OED によっても ‘road’ が「道」の意味で用いられた例は、16 世紀より後である (s. v.6)。」松浪有『講座英米文学史第 1 巻詩 I』(大修館書店、1977) (23)。また、頭韻詩法原則として、
i. 子音は、同じ子音どうしが頭韻を形成する。

ii. sp-, st-, sc- (sk-) の子音群は、同じ子音群どうしが頭韻を形成する。

iii. 頭韻は、音素的レベルのもので、異音どうしの頭韻が成立する。従って、[h] と [x] が、[g] と [j] が頭韻をなす。

iv. 母音は、同じものと限らず、どんな母音どうしても、頭韻に用いられる。(Beowulf 他からの各用例は省略)

以上のような頭韻の原則は、それらの詩が本来目で読むためではなくて、耳で聞くためのものであったことを裏づけする。」(20-21) 頭韻詩のリズムと堅琴とジーファース韻律論の関連 (24-38)、「Oral Formula」(口誦定型) (39-51) も興味深い。

ne hyrde ic cymlicor ceol gegyrwan
hildewæpnum ond heaðowædum,
billum ond byrnum; him on bearme læg
madma mænigo, þa him mid scoldon
on flodes æht feor gewitan.
Nalæs hi hine læssan lacum teodan,
þeodgestreonum, þon þa dydon
þe hine æt frumsceaft forð onsendon
ænne ofer yðe umborwesende.
Þa gyt hie him asetton segen ge[l]denne
Heah ofer heafod, leton holm beran
geafon on garsecg; him wæs geomor sefa,
murnende mod. Men ne cunnon
secgan to seðe, selerædende,
hæleð under heofenum, hwa þæm hlæste onfeng. (ll. 26-52)

「やがては、勇ましいシュルドも、天命を全うして、主のご加護の所へ逝った。かくして、シュルディンガスの君が、言葉で統治していた時に、王自ら命じていたように、親族の側近たる彼等は、王[のなきがら]を、海の潮の流れに運んだ。いとしき国王は、長い間治めていた。港には、王の船が舳先に環をつけ、氷でおおわれ、まさに出発しようとしていた。それから、人々はいとしき君、財宝を与えたもうた名高き王君[の遺体]を、船の中央、帆柱のそばに置いた。そこには、はるか遠くからもたらされた数多くの宝や、装飾品があった。われ[『ベオウルフ』の作者]は、これまでこれに優るすばらしい武器、よろい、剣、それから、くさりの戦衣とで、船をよそおったのを聞いたことがない。王の胸の上には、たくさんの宝が置いてあった。それらは、王と共に潮の求めるはるか遠い所へ出発しなければならないものだった。決して部下たちは、王が幼

かった時に、一人で浪の上に送り出された時よりも、よりすくない宝を、用意したのではなかった。それから、さらに彼等は、王の頭上高く金色の旗をかかげ、波の運ぶにまかせ、大海原に王を与えた。彼等の心は悲しく、胸〔の中に〕は、嘆きがあふれていた。天下の館の参事官も、兵士らも、この船荷をだれが受け取ったか、真実話すことは出来ない。」 (2-3)

シュルド王の船葬の場面で、‘hringedstefna’ (l. 32) 「舳先に環をつけた船」の中央帆柱のそばに名高き王の遺体を置き、数多くの宝や装飾品、よろい、武器、剣、鎖の戦衣を船に乗せて海へと送り出す。⁶

43 行目から 46 行目の表現は、‘litotes’ (緩叙法《控え目な言い方をしておいて強い意味を表す修辞法で、一般的には understatement という》) である。

Pa wæs Hroðgare heresped gyfen,
wiges weorðmynd, þæt him his winemagas
georne hyrdon, oðð þæt seo geogoð geweax,
magodriht micel. Him on mod bearn
þæt healreced hatan wolde,
medoærn micel, men gewyrcean
þonne ylðo bearn æfre gefrunon,
ond þær on innan eall gedælan
geongum ond ealdum, swylc him god sealde,
buton folcscare ond feorum gumena.
Ða ic wide gefrægn weorc gebannan
manigre mægþe geond þisne middangeard,
folcstede frætwan. Him on fyrste gelomp,

6 1939 年、Sutton Hoo の舟塚 (7 世紀) が発掘され、埋葬品が British Museum に展示されている。Angela Care Evans, *Sutton Hoo Ship Burial* (British Museum P:London, 1986; rev. 1994)

ædre mid yldum, þæt hit wearð ealgearo,
healærna mæst; scop him Heorot naman
se þe his wordes geweald wide hæfde.
He beot ne aleh, beagas dælde,
sinc æt simple. Sele hlifade,
heah ond horngeap, heaðowylma bad,
laðan liges; ne wæs hit lenge þa gen
þæt se ecghete aþumsweorm
æfter wælniðe wæcnan scolde. (ll. 64-85)

「ところで、フロスガールに誉れなす戦さの成功が与えられ、彼の部下たちは、すすんで彼の命令に従い、その結果、若い従者たちが増し、たくさんの従臣たちとなった。この彼の胸の中に浮かんだのは、人の子がこれまで聞いたこともないような大きな宴の宮殿、大広間を人々に造らせるように命じ、そこで、公有地と人命を除いて、神の与えたすべてのものを、老若問わず領ち与えたいという願いであった。そこで、われは地上のいたる所、多くの人々に大きな館を飾り上げるべく命じたのを聞いた。時ふさわしく、かつ、俊敏にも最大の宮殿が、人々の中に完成することになった。自らの言葉で統治している君主は、これをヘオロート〔白鹿〕と名づけるように命じた。彼は約束を裏切らず、酒宴の時は、宝や金環を領ち与えた。王宮は高く、広い破風をつけ、そびえ立っていた。それは戦いの火の波、敵意のある焰を待っていたが、ひどい憎悪が原因たる義理の父子間の刃の交戦は、まだ間近にはせまっていなかった。」（4-5）
この素晴らしい王宮は近い将来焼け落ちることが予言されている。

Ða se ellengæst earfoðlice
þrage geþolode, se þe in þystrum bad,
þæt he dogora gehwam dream gehyrde
hludne in healle; þær wæs hearpan sweg,

swutol sang scopes. Sægde se þe cuþe
 frumsceaft fira feorran reccan,
 cwæð þæt se ælmihtiga eorðan worh[te],
 wlitebeorhtne wang, swa wæter bebugeð,
 gesette sigehreþig sunnan ond monan
 leoman to leohte landbuendum
 ond gefræt made foldam sceatas
 leomun ond leafum, lif eac gesceop
 cynna gehwylcum þara ðe cwise hwyrfaþ.
 Swa ða drihtguman dreamum lifdon
 eadiglice, oððæt an ongan
 fyrene fre[m]man feond on helle.
 Wæs se grimma gæst Grendel haten,
 mære mearcstapa, se þe moras heold,
 fen ond fæsten; fifelcynnes eard
 wonsæli wer weardode hwile,
 siþðan him scyppend forscrifen hæfde
 in Caines cynne. Þone cwealm gewræc
 ece drihten, þæs þe he Abel slog;
 ne gefeah he þære fæhðe, ac he hine feor forwræc,
 metod for þy mane, mancynne fram.
 Þanon untydras ealle onwocon,
 eotenas ond ylfe ond orcneas,
 swylc gi[ga]ntas, þa wið godde wunnon
 lange þrage; he him ðæs lean forgeald. (86-114)

「ところで、暗やみに住む力なる悪魔は、いらだちながら、毎日
 宮殿の高らかな歓喜の声を聞く苦しみにさいなまされた。そこから
 は、豎琴の音、美しい歌人の声があった。〔『創世記』第一章、第十

四節以下参照]

はるか昔にさかのぼって、人類の始まりについて語ることの出来る人は言った。かれは歌う—全知全能の神が水をめぐらす大地、美しい土地を創造し、それから、堂々と、太陽と月を、地上にすむ者たちに明かりとしてそなえつけ、さらに、地上いたるところ。木の枝と葉で飾り、生きて動くことの出来る万物のために生命を創り出した。このようにして人々は、地獄に住む或る悪魔が罪を犯すまでは、幸福にくらしていた。恐ろしいその来客〔悪魔〕は、名前をグレンデルと言い、湿地と荒原と要塞を固守する悪名の、境界の荒地を放浪する者であった。創造を司る神が、カインの族にある彼を追放してからは、不幸にも、しばらくの間、怪物たちの住む土地を守っていた。永遠の君主は、彼がアベルを殺したのを理由に、その殺人の罪に復讐した。彼はこの敵意を喜ばず、創造の神は、彼をそのあやまちのため人類からはるか遠くへ追放した。彼から悪者すべて、大鬼、小鬼、悪霊、それに神に長い間抵抗した巨人たちが生まれ出た。その為に、神は彼等に報復したのである。」 (5-6)

いよいよ Grendel の登場。彼は「カインの末裔」、「神の敵」である。

Gewat ða neosian, syþðan niht becom,
hean huses, hu hit Hringdene
æfter beorþege gebun hæfdon.
Fand þa ðær inne æþelinga gedriht
swefan æfter symble; sorge ne cuðon,
wonsceaft wera. Wiht unhælo,
grim ond grædig, gearo sona wæs,
reoc ond reþe, ond on ræste genam
þritig þegna, þanon eft gewat
huðe hremig to ham faran,
mid þære wælfylle wica neosan.

Ða wæs on uhtan mid ærdæge
 Grendles guðcræft gumum undyrne;
 þa wæs æfter wiste wop up ahafen,
 micel morgensweg. Mære þeoden,
 æþeling ærgod, unbliðe sæt,
 þolode ðryðswyð, þegnsorge dreh,
 syðþan hie þæs læðan last sceawedon,
 wergan gastes; wæs þæt gewin to strang,
 lað ond longsum. Næs hit lengra first,
 ac ymb ane niht eft gefremede
 morðbeala mare ond no mearn fore,
 fæhðe ond fyrene; wæs to fæst on þam.
 Ða wæs eaðfynde þe him elles hwær
 gerumlicor ræste sohte,
 bed æfter burum, ða him gebeacnod wæs,
 gesægd soðlice sweotolan tacne
 healðegnes hete; heold hyne syðþan
 fyr ond fæstor se þæm feonde ætwand. (115-143)

「時に、夜ともなると、彼〔グレンデル〕は、戦衣のデネの人たちが酒宴のあと、宮殿をどのように占有しているかを見とどけようとして、高くそびえる宮殿を、おとずれた。彼は、そこにたくさんの高貴な人々が、宴のあと眠っているのを見た。彼等は悲しみも人々の苦しみも予知しなかった。恐ろしく、残酷な、しかも、はげしく、すばやいこの悪魔は、すぐさま寝ている三十人を掴み取り、再びここから帰路につこうと、喜々としてたくさんの死人を獲物にたずさえ、自分の住み家へと出発した。

まもなく、夜が明け、グレンデルの戦さのわざが、人々に知れわたった。夜明けと共に泣き声が、大きな朝のざわめきが、わきあが

った。名高い王、徳と力の君主は悲しみに沈み、彼等はいまわしい
来客の憎い足跡を確かめると、自らの部下たちの悲しみに耐えし
のんだ。彼の挑戦は、あまりに強力、悲惨で、長期間にわたるもの
だった。間をおかず、次の夜再び彼は、大量の虐殺を行ったが、そ
のために自らの暴力と憎むべき行動にしりごみすることはなかった。
彼には、これら悪行があまりにも深くしみこんでいた。時に、館の
武勇者〔グレンデル〕の憎悪が、明らかな証拠によって人々に示さ
れ、正しく伝えられた時、はるか遠くのどこかへ〔避難して〕、館
外に休む場所、住み家の寝所を求める人が容易に見とめられた。こ
の悪鬼を逃れた者は、そのあとはさらに遠く、堅実に身を守つ
た。」 (6-7)

Grendel の襲撃、殺戮はすさまじい。

Swa rixode ond wið rihte wan,
ana wið eallum, oðþæt idel stod
husa selest. Wæs seo hwil micel;
XII wintra tid torn geþolode
wine Scyldinga, weana gehwelcne,
sidra sorga. Forðam secgum wearð,
ylða bearnum, undyrne cuð,
gyddum geomore, þætte Grendel wan
hwile wið Hroþgar, heteniðas wæg,
fyrene ond fæhðe fela missera,
singale sæce, sibbe ne wolde
wið manna hwone mægenes Deniga,
feorhbealo feorran, fea þingian,
ne þær nænig witena wenan þorfte
beorhtre bote to banan folmum,
[ac se] æglæca, ehtende wæs,

deorc deapscua, duguþe ond geogoþe,
 seomade ond syrede, sinnihte heold
 mistige moras; men ne cunnon
 hwyder helrunan hwyrftum scriþað.
 Swa fela fyrena feond mancynnes,
 atoll angengea, oft gefremede,
 heardra hynða. Heorot eardode,
 sincfage sel sweartum nihtum;
 no he þone gifstol gretan moste,
 maþðum for metode, ne his myne wisse. (144-169)

「かくして、彼は館を支配し、善行に挑戦し、一人でもってすべてを相手にし、ついに、最上の宮殿が空家となるに至った。その間の月日は長かった。十二年間、シュルディンガスの君主は、悲しみを、ひどい悲痛のすべてを味わった。それ故に、長い間、グレンデルがフロスガールに対し戦い、悪行と暴力、それに数々の憎きわざと連続的な戦さを何年間も行ってきたことは、人の子たちに悲しくも歌になり知られた。彼はデネの国のいかなる武人とも和平を結びたがらず、悪行を捨てようともせず、財宝によって、停戦しようとしなかった。また、殺人者〔グレンデル〕の手元から、輝かしい賠償金を期待できる参事官は、一人もいなかった。この悪鬼、死の影なる者は、老いも若きも別なく攻撃しながら、あるいはさまよったり、あるいはかくれたりした。彼は、永久の夜、霧深い荒野を守っていた。このような悪鬼たちはいずこへたどり着くのかは、人々の知るところではなかった。このように、人類の敵、恐ろしい放浪者は、しばしば、たくさんの悪行、勇ましい害悪をなし、暗黒の夜ともなれば、美しく飾られたヘオロート宮殿に、住んだ。しかし、彼は天の支配者がおられるために、王の玉座に近づくことも出来なければ神も彼に愛を示さなかった。」 (7-8)

12 年間も Grendel は襲撃をくりかえしたが、さすがに神のご加護のおかげでフロスガールには近づけなかった。その噂をイエアト族（スウェーデン南部の部族）のヒエラーク王の甥で若き勇者ベオウルフが伝え聞き、14 人の従者たちと共に海を渡り救援に赴く。フロスガール王は、嘗てベオウルフの父エッジセーオウを助けた縁もあり、歓迎の宴をもうける。ベオウルフたちが宮殿の警護に当たっていると、夜更け、Grendel が襲って来る。今まで見てきたように、Grendel の外観の描写はすくない。しかしここでは、

Com þa to recede rinc siðian,
dreamum bedæled. Duru sona onarn,
fyrbendum fæst, syþðan he hire folmum [æthr]an;
on bræd þa bealohydig, ða he [ge]bolgen wæs,
recedes muþan. Raþe æfter þon
on fagne flor feond treddode,
eode yrremod; him of ealum stod
ligge gelicost leoht unfæger. (720-729)

「喜びをうばわれたこの男は、突進した。彼が両手をふれると、しっかりと鉄で止められた扉はすぐさまひらいた。悪しき者は怒っていたので館の入口に猪突した。そのあと、すぐさま悪鬼は飾られた床を踏みつけ、怒りに燃え、進入した。彼の両眼からは焰に似た恐ろしい光が輝いた。」 (33-34)

と焰のような恐ろしい Grendel の両眼が描写されている。彼は従者の一人を喰らい、ベオウルフに掴みかかった。眠ったふりをしていたが、がばと跳ね起きた勇者は怪物と一騎打ちになり、ついに怪物の片腕をもぎ取る。敵は血を滴らせながら荒地へと逃げていく。

ベオウルフはヘオロットの屋根の下に手、腕、肩をつるす。「一そ

こには鉤爪がすべて備わっていたが――」⁷ 翌日、フロスガールは盛大に祝宴を開く。その晩、Grendelの母親の女怪が息子の復讐に来襲。腕をとりもどし、フロスガールの寵臣をさらい食い殺す。ベオオルフは再び怪物退治を依頼され、ただ一人沼の底に潜り、洞窟で女怪を倒し、床に倒れて死んでいた Grendel の首を持ち水面に浮かび上がる。フロスガール王はまたも祝宴を催し、褒賞を賜りイエーアトに帰国する。50年過ぎて、ベオオルフは老王となり、火竜を退治し致命傷を受け、死ぬ。盛大な火葬がとりおこなわれる。ベオオルフは、成しとげた功績は民話的内容のもので、現実性に乏しく、伝説的英雄であろう。⁸ それに比べ Grendel は迫力がある。一つの解釈として、「彼とその母親は厳しい北海 (North Sea) の力を、主人公ベオオルフは春になって低地の海岸を襲う海を撃退する守護神を表す、彼の平和な治世は夏の静穏な気候に対応し、竜によって表される秋の嵐を追い返すが、冬の到来とともに死ぬ。」⁹ 8世紀の人々は、実在すると信じていたであろう。

Grendel は Tolkien の言うように、‘disease’ (疾病)、‘old age’ (老齢)、‘sword of hate’ (戦闘) と共に人命を奪う、‘God’s Foe’ (神の敵)、‘Devil’ (悪魔)¹⁰ であり、Heaney 曰く、‘a mixture of Caliban and hoplite’ (キャリバンと完全武装の兵士の合成)¹¹ である。21世紀の今、相変わらず戦火は収まらず、地球温暖化で様々な自然災害に人々は苦しんでいる。別の怪物が現在も何処かにいそうである。

7 忍足欣四郎訳 (88) による。

8 松浪有 (91)

9 忍足欣四郎訳 (324) 参照。

10 J. R. R. Tolkien, ‘The Monsters and the Critics’ (1936), *An Anthology of Beowulf* ed. Lewis E. Nicholson (U of Notre Dame P : Notre Dame, 1963) (51-103)

11 Heaney, ‘Introduction’ (xviii)